『雑文穿袋』注釈稿(中)

伴野 英一

(国語・国文学)

(令和五年十二月二十六日受理)

はじめに

前号に続き、『雑文穿袋』に注釈を施す。紙幅の都合から上・中・下の三回に分ける。

底本の書誌は前号をご参照願いたい。底本の閲覧・使用をさせていただいた早稲田大学図書館に感謝いたします。未だ至らぬ点多いので大方のご批評を乞う。

翻刻凡例

一、翻刻にあたっては可能な限り底本通りにすることを目指した。誤脱と思われる箇所も底本通りに残し、語釈において指摘した。

一、丁移りはその丁の表及び裏の末尾に、表であれば(ㇿオ)(八オ)、

裏であれば(ㇿウ)(八ウ)などと、底本の丁付通りの漢数字と表裏の略記を組み合わせて示した。なお丁付を欠く場合は(丁付なしオ)などとした。

一、句読点は底本通りとした。

一、仮名は現行の平仮名に改めたが清濁は底本通りとした。明らかに片仮名で表記しようという意識をもって書かれたと思われる片仮名は底本通りとした。

一、繰り返しを表す反復記号などは底本通りとした。

一、漢字は原則として新字体に置き換えた。ただし特記すべきだと考える表記については語釈において指摘した。

一、口絵はこれを省いた。

一、作品・引用文中に現在の人権意識にそぐわない語句・表現があるが、歴史的資料である原文を尊重してそのままとした。

※類出する典拠は以下のように略した。『俗語解(雑劇名色)』＝『解』、『雑字類編』＝『編』、『南山俗語考』＝『南』、『劇語審訳』＝『劇』、『唐語使用』＝『唐』、『小説字彙』＝『彙』、『和漢三才図会』＝『図会』、『古今事文類聚』＝『類聚』、『川柳評万句合』＝『万』、『金瓶梅』＝『金』、『紅樓夢』＝『紅』。

《翻刻》

此蔵曰宜哉きなんしの耳にのこれること扱そのきなんしといふ国あれば又きねへといふ国有詞はいづれをか雅とせん先生曰きなんしは則華音也華音はよし原のきねへは則番語也(十四ウ) 番語はおかばしよそのうへに何かわからぬかきくけこのあいことばはこれ南蛮鳩舌也……は異域のわかけん我賢なるを以てこれを説ども語かよはさればほどこそ語通せざるをいふは漢張鞞語國に術なし今汝博望侯にならつて夷狄をあるきし人ひろく所々を周旋して夷狄の語も又しんぬへし夷狄をかこの場にいたつて我汝をさるごと遠し(十五ウ) 此蔵曰先生博学でよく事を解す可謂通儒矣小子自又物まねをして似ずといふ所なしこれから先生のちんぶんかんを覚えて通儒のまねをなさんしかしかた仮名もよめませぬからいか御ざりましよとかといへは先生当世の人物かたかながよめれば一かとの学者平仮名さへよめればいふんまいる(十五ウ) ことで

御ざるさようならば先生その詞をくはしく教へ給へ奴不敏なりといへどもむだになさし先生曰小子しるせわれその語をつたへんと白烟管をとり直し口づからおしゆ此蔵再拜して先生の銀きせるにはよし及ばすともわれけふよりして白みながしくらいにはこぢつけべしと採筆で鼻紙(十六ウ)のはしにするす似山先生咳はらいして扱これからお断申詞をあらましお覚へなさるゝと詩文章家のやからと御出会の御はなしか出来ますまつた手紙などへもちよびとおあいしらひなさるかよひ(十六ウ)

《語釈》

●華音／番語＝華音(かおん・かいはん)は中国語の意。番語はそれ以外の外国語の意。「岡島援之ハ長寄にてハ長左衛門といひし者也華音には奇なる生也」(『ひとりね』下 狩野文庫本)「蠻語とハ異國の詞をいへり」(『警諭尽並古語名数』) ●おかばしよ＝岡場所。官許の遊里である吉原以外の深川、品川などの私娼地。「免許の遊所と岡場所は。雲泥万里の違ある勢を見せてこそ吉原ともいふべけれ」(安永三(一七七四)刊『里のをだまき評』) ●かきくけこのあいことば＝深川にて遊女らが、以下に挙げる例のように語の間にカ行の文字を入れて客には解せぬようにした隠し言葉。「カキクケコ。の五音の字を付云也。譬は。客と云時は。キキヤカクク」(明和七(一七七〇)刊『辰巳之園』) ●南蛮鳩舌＝南蛮は東夷・北狄・西戎に並ぶ、四周の夷狄に対する蔑称の一。鳩はモズ(百舌鳥)。

本来は駄。「鵠 亦作鳩駄」(『洪武正韻』)。駄舌は通ぜぬ異人の言語。「今也南蛮駄舌之人、非先王之道」(『孟子』勝文公上) なお品川は江戸南方なので南蛮の異称がある。●博望侯／張騫＝張騫は前漢の軍人。武帝の命で派遣され、大月氏国に達する十数年の旅行によって西域の知識をもたらした。また対匈奴の戦功によって博望侯に封ぜられた。「葡萄ハ(略)此物古大漢の張騫といふ人大宛国に使として行かの国よりも種を求めて帰しといへり」(『ひとりね』下 狩野文庫本) ●通儒＝博識の学者。「俗語説得好與其出一個斲削元氣的進士不如出一個培養陰陽的通儒」(『儒林外史』八) ●小子＝自身をへりくだってという語。「小子がをしゆる所は敵を打にあらず。打るゝにあらず」(宝暦四(一七五四)刊『魂胆物勘定』中) ●一かと＝相当。あるいは、さも一人前であるかのような様子。「工夫仕出したけんもんで。今はいつかどおもてを張。疲身代も相応に」(安永八(一七七九)序『家暮長命四季物語』) ●まいる＝「する」の尊敬語。「なざる」に同じ。「かやうなる事は世をのがれつゝしづかに暮してあんじばかつてんまいるべし」(万治二(一六五九)刊『百物語』下) ●不敏＝才知が不足していること。へりくだって言う。「臣不敏なりといへ共。呉王をあざむきて。君王の死をすくひ本国に帰して二たび。大軍をおこし。此はちをすゝかんと思ふ」(元禄一一(一六九八)刊『太平記』四) ●白烟管＝白は銀(白金)製の意。銀煙管。「鼻に見へる色男。顔は黒ふしてきせるは白し」(安永二(一七七三)刊『当世気とり草』)「先大通と申ものは。本田あた

まに銀烟管」(安永八刊『無頼通説法』) ●口づから＝くちずから。そのひと自身の口から。「定家卿より幽齋法印まで。一器の水を一器にうつすやうに。口づから伝へ給しなり」(天和二(一六八二)刊『戴恩記』上) ●白みながし＝しろみは、しろめ(白鐵・白目)の訛。錫と鉛の合金。錫の接着や銅器の防錆に使う。「白鐵 びやくろふ しろめ」(『図会』)「岩かねの白目なかし春の雪 正尹」(寛永一〇(一六三三)刊『誹諧発句帳』春 残雪) 真正の銀には及ばないが白鐵を張り付けたまが物程度にはという意で述べた。●まつた＝また。さらに、加えての意。「天竺の仏道は、色を捨よと甚だ女郎を戒しめ、まつた漢土の儒道には、道を好んで色にかへよと教へたり」(宝暦五(一七五五)刊『花菖蒲待乳問答』五) ●おあいしらひ＝取り合わせること。添えること。「しほとりか。なんとか。いふところに。ふきか。みやふがを。あいしらる」(安永七(一七七八)刊『広街一寸間遊』)

《翻刻》

倡家しやかといひ 倡門もんといひ 青楼せいろうといふみな 倡妓しやぎといふは女 花娘くはしやうおなじ 粉こな頭かぶふんばりなど 時妓ときはやる 困妓こんうれぬ 村妓むらおかばしよのいた 孫旦じゆたん女郎の蒼妓そうはと 雛妓ひなしんぞう 姐妓せあね女良 榎丁えんていおやかた 老主らうしゆ管かんまはし 老婆らおかさん 老鴛らうこてさん 阿兄ああにさん 幫間ぼうかんたいこもち 牽頭けん同 歌妓か女にいしや或 又また地女ぢには 夫人ふじんおおくさま 未亡人みわう後家ごけ 寡婦くわふ同 阿娘あにやむすめ (十七才) 処女しよ同 当とう

〆の 〆料理ちや屋又いざか屋など 絶世うつくし 国色 佳麗 佳人
 〆女料理のしやく給仕に出る女也 絶世うつくし 国色 佳麗 佳人
 粧資 楚腰とはほそいこし也楚王 新粧したて也 雅素地がほ 脂粉
 べにお 時勢粧当世 玉簪 金釵 玉搔頭 象掃 雲鬢
 びん 蝉鬢とうら 倭墮髻でもしつています 呉姫 越艶いづれもうつ 青蛾
 よき女 青春わかい (十七ウ) 銀牙いろ 皓齒同 棒心西施といふ美人つ 花
 燭 婚禮 新婚同 画眉ひきまゆげ也 的 職房に成りし時ほうべにをさしてしるしとす
 金閣 洞房でござる 空房女房 金運歩 邯鄲歩 などいふは美人のあ
 ます女郎の 月下老人むすぶの神 媒妁なだち 淫蕩しつ 絃歌ひいたりか
 道中の事也 素手のしろ 朱唇あかき事 包定(十八オ) すること也 包月同 従良ださ
 情郎 浪子うはき 巧計手くだ 調これはいまいふて 村客いなかく
 偷期にくること也 孤老 合意人きあひ 忤情客 氣のあは 串門子
 つねにいり 復爐のきやく 跳槽こと 梳籠 みづあげ 上頭同 売奸
 こむきやく 虚工むだこと 煙火榻 あげやのざしき (十八ウ) 遊治郎 遊治郎色男
 噴碎客 むつかしい客

《語釈》

●倡家／倡門／倡妓 娼 俗倡字(『正字通』)娼妓(『ケイセヒ』)(『南』)
 ●花娘 花娘 ウカレメ(『解』) ●粉頭 本来は単に遊女の意。
 「不過娼婦粉頭之流」(『紅』六〇) ●ふんばり 安い女郎の蔑称。「い
 々(この)中の黄金ふんばりの中の貞女と世の人申あへり」(明和七刊
 『蕩子釜枉解』) ●時妓 時妓 ハヤリ女郎(『解』) ●村妓 村

的野(『劇』) ●困妓 ハヤラヌ女郎(『解』) ●猿旦 猿
 旦 妓女総称曰(『解』) ●蒼妓 蒼妓 トシマ(『解』) ●
 雛妓 雛妓 シンゾウ(『解』) ●姉妓 大姐 姉女郎(『解』)
 ●榧丁 榧丁 タツワ(『解』) ●まはしかた 遊女の部屋の寝
 具などの器物を扱う役目。各遊里によって職掌に違いがある。「廻
 しかた床を納んと乞ふ故。是にしたがふ」(『魂胆惣勘定』上) ●老
 婆 老婆女房ノコト(『彙』) ●おかさん 茶屋などの女房の敬称。
 「まつ椽頬に腰掛ていつも爰で酒か過ますおかさんすかや」(明和八
 一七七) 刊『遊婦多教寄』 ●老鴛 通俗編では「妓女之老
 者曰鴛」とあり、遣手のこととしている。 ●てさん 芸妓が引
 手茶屋や船宿の亭主を呼ぶ語。「てさんとは。茶屋船宿のていし
 ゆなり」(『魂胆惣勘定』上) ●阿兄 兄 阿(『編』) ●あに
 さん 芸妓が引手茶屋や船宿の息子などを呼ぶ語。「あにさんと
 は。茶屋船宿のむすこ。或は兄弟の事なり」(『魂胆惣勘定』上) ●
 幫閑 牽頭 幫閑 タイコモチ、「牽頭 タイコモチ」(『解』)
 ●歌妓 歌妓 ゲイコ(『編』) ●夫人 夫人(『編』) ●未亡
 人 婦人夫死称未亡人(『太平御覽』礼儀部二二) ●寡婦 寡婦
 「寡婦」(『編』) ●阿娘 通常は母をいう。「阿娘母上」(『南』) ●
 処女 処女(『編』) ●当墟女 当墟は酒屋の店番の意。「尺売車
 騎買酒舍乃令文君当墟」(『漢書』司馬相如伝上) 墟は墟・鏰・鏰に
 作る。 ●絶世 北方有佳人、絶世而独立(『漢書』外戚伝上) ●
 国色 「斎有黄公者好謙卑有二女皆国色」(『尹文子』大道上) ●佳

麗麗 〓 「後宮佳麗三千人」(白居易「長恨歌」) ● 佳人 〓 「自古佳人多命薄」(寬文六(一六六六)刊「類聚」後集一一「薄命佳人」) ● 楚腰 〓 楚の靈王が腰の細い美人を好んで、絶食から餓死者が多く出たという故事から。「楚王宮裏細腰」專ソウワノキウリサイヨウモツノウナリ(安永四(一七七五)刊「後編風俗通」)「楚腰腸断掌中輕」(杜牧「遣懷」) ● 新裝 〓 「於是向月娘鏡台前重新裝点打扮出来」(「金」三三) ● 脂粉 〓 「怪得独饒脂粉態」(白居易「戲題木蘭」) ● 玉簪 / 玉搔頭 / 金釵 〓 「カンザシ 玉簪 搔頭 黃金ノ釵」(「編」) ● 象拵 〓 「佩其象拵」(「詩經」 国風・魏風) ● 雲鬢 〓 「雲鬢花顔金步搖」(白居易「長恨歌」) ● 蟬鬢 〓 「蟬鬢加意梳」(白居易「婦人苦」) ● とうらうびん 〓 女性の髮形で鬢の内側に鯨骨などを鬢指びんざしを入れ込んで膨らませたもの。「燈籠鬢は横へかく」(安永五(一七七六)刊「爰かしこ」)「鬢は燈籠如し。櫛クシは三ヶ月如し」(安永四刊「放蕩虚誕伝」) ● 吳姬 / 越艷 〓 李白の「越女詞五首」をふまえるか。 ● 青娥 〓 「紅粉青娥映楚雲」(杜審言「戲贈趙使君美人」) ● 西施 〓 春秋時代、越の美女。吳王はこれを寵愛して国を滅ぼしたとされる。美女の例としてよく挙げられる。「唐朝たうたうの楊貴妃やうききひ、虞氏ぐし、西施せし、我朝わがたうの衣通姫えとほりひめ、小町のうへをはじめとして、惣じて女メの美称びしやうなるを」(「花菖蒲待乳問答」四) ● 青春 〓 「容色如青春」(李白「送李青帰南葉陽川」) ● 銀牙 〓 「朱唇方口露銀牙」(「西遊記」五二) ● 皓齒 〓 「明眸皓齒今何在」(杜甫「哀江頭」) ● 花燭 〓 「花燭」(「編」) ● つかへ 〓 癩しかく(胸部や腹部の癩癬)で胸が詰まったような症状。「胸の痞むねのなんといふ」(宝曆六

(一七五六)刊「風俗七遊談」二) ● ひきまゆげ 〓 眉毛を剃って眉墨などで描いた眉。「眉毛まゆげの無なはお定さだりの。墨眉毛ひきまゆげにて」(安永八序「竜虎問答」) ● 洞房 〓 「選妓隨雕輦 征歌出洞房」(李白「宮中行樂詞八首」) ● 月下老人 〓 「続幽怪録」四「定婚店」にある、唐の韋固が月夜に出会った老人に妻となる女性を予言されたという話から、仲人を言う。「昔韋固と云人ありいま定れる妻もなし或時旅たちして宋城と云にやとりたる時一人の翁手に袋を持月に向ひて書物を見るあり」(「ひとりね」下 狩野文庫本) ● むすぶの神 〓 男女の縁を取り結ぶ神。むすひのかみ(産靈神)を後に前述のように解した。「仏にだにも、愛染あいぜんしやう王神おうじんだにも結ぶの神、と承る」(慶長一四(一六〇九)以降刊「うらみのすけ」上) ● 媒灼 〓 「媒灼」(「編」) ● しつぶか 〓 多淫。またはその人。「御病氣はとかくしつぶか、よふござんせん」(明和八刊「艶占奥儀抄」) ● 朱唇 〓 「赤 朱」(「編」) ● 包定 〓 「包定」(「解」) ● あげづめ 〓 揚げ詰め。遊女を連日揚げ続けること。「くるよもくあげづめあげづめのといふはらだ」(安永七刊「胡蝶夢」) ● 従良 〓 「全盛のひかりにめてかよはぬ千鳥のおともせておしつけ従良みづかの有よし」(「ひとりね」下 国会本) ● 包月 〓 「包月 日アケツメ」(「解」) ● うけださる、〓 請け出す。年季中の遊女の契約を代償を支払って解除させること。身請け。「さきだつて姉女郎あねうけだされて今では三みつになる子こヲもふけ」(「蕩子釜杵解」) ● 連椿 〓 「連椿、ケガイ」(「解」) ● やまねこ 〓 本所回向院前などの社寺境内などで客を取る私娼。「小宿こじやうでの出合であいにあるき。今日を過す

る是を山猫といふなり」(『風俗七遊談』三) ●私窠シヤカ」(『編』) ●かくし町カクシチヨ」私娼窟・岡場所の意。「かくし町何のけも無イ時もあり」(『万』明和三(一七六六)義三) ●地いろチイロ」地色。娼妓が客でない地元の男を情人とすること。「或は地色の風にそらされまたは密夫の波にしづんで」(寛延二(一七四九)刊『跣婦伝』) ●さしサシ」差し合い、差し障りの意。「扱サツ々いかなる夜暮助土大蔵にても。粹スヅさま大尽さまといはれ。悪わるじやれも座附ザツキになり。指さしをいふても聞つけぬふりをされ」(宝暦四刊『当世花街談義』四) ●情郎セイロウ」「好與情郎懷袖中」(李節度使姫「書紅綃帕」) ●いろきやくイロキヤク」色客。娼妓の客でなおかつ情人。客色とも。「たとへ色客になつても。ずいぶんと心をゆるさず。その女郎に。色事のできぬやうに。用心が肝要カネなり」(明和五(一七六八)刊『吉原大全』五) ●うはききやくウハキキヤク」うはきは浮気・上気。浮かれがちで気が散る様子。また、移り気で情を動かしやすい様子。「宇選は物日のやくそくしてもたしかならぬうわき客いはゞ二度の月見に雨のふりたるか」とし」(安永三刊『古今馬鹿集』) ●巧計カウケイ」「千般巧計不如本分為人」(『西遊記』一一) ●てうすテウス」嘲す。あざけるの意。「そそんならお歌さんのお酌ではへ東そりやアもふいくらも呑のめるのさ歌ほんにかへいつそうれしいねと少し嘲あざわらすす気味也」(安永八序『深川新話』) ●よこヨコ」客に揚げられている遊女が、その時間中に抜け出して他の客や情人のところに行くこと。「ふるといふわがま、なし。横よこにゆくべき卑劣ひれつもなく」(『跣婦伝』) ●孤老コロウ」「孤老——者世称大夫」(『解』) ●合意人カウイジン」「彼

此合心合意的諫勸二爺謹慎世務」(『紅』六八) ●串門子クワンモンジ」扉ヒラを通じて行き来する人の意。「吃了飯便自去串門子」(『紅』七七) ●跳槽シヤカ」転替テンカえするの意。「元人伝奇以魏明帝為跳槽俗語本此」(『通俗編』二二 婦女) ●梳籠シヨウロウ」梳弄シヨウリョウ。一攏シヨウ(『編』二) ●みづあげミヅアゲ」水揚・水上。娼妓が初めて客をとること。「けいせい公界十年禿のはしめ新造の水揚より」(安永一〇(一七八二)序『契情極秘卷』) ●ほかごホカゴ、ろロ」他の物事や人物にひかれる心。「女はたま〜外心ほかごなどあると不儀ふぎもの也」とす(『契情極秘卷』) ●遊冶郎ユウヂロウ」「岸上誰家游冶郎 三三五五映垂楊」(李白「採蓮曲」) ●噴碎客フソクヤカマ」「鎖碎的ソフスオイチヤカマシヒ」(『南』)

〔翻刻〕

間壁カンヘキとなり 隔壁房カクとなり 間熱カウネツにぎやか 冷静レイセイさみしい 乾浄ケンシヨウきれ 醜醜ウシウシきたない 文雅ブンガがきやしや 風流フウリウだて 感激カンキツありがたい 戲弄キリョウなぶる 兇戲キョウキあどけい 嘲笑チウシウさげすむ 看破カンハあいそ 誹謗ヒバウおろす事 争口ソウコウからかふ 奸曲カンキョクしよにん也 看重人カンジュウジンをた 看輕人カンケイジンをやすく 商議シヤウギだんこウ 酌量シヨクリヤウりやうけ 料理リヤウわけをつて 隄防テイポウ用心ウシンみ 隄調テイテウさしづ 明白メイハクめいほうちやあ 出神シュツシンきぬけ 説謊セツコウをいふ 乖巧クワイコウいきすぎ 掛念ケケンが、り 生疑セイギうたがひ 猜疑サイギうたがひ 生疎セイソかたがひ 費心ヒシンつかひ 力行リキョウつとめる 仔細シサイねんのこと 穎悟エイゴすい也 愚鹵グロやほ也 伶俐レイレイりこウ 溫柔ウオンおむ 奢侈シヤイおごる 高傲コウガウ大づらをする也 傲慢ガウマンうぬば 寄書キショふみをもの 致意チウイことつけ 没信モクシンたより 抱住ホウヂウ他人にだき 側声ソクセイこえをた 慚愧サンクイを、はづかし 走風ソウフウなくすことよそへ 作色サクシキする也 冷咲レイサイさげすみ (十九ウ) 耐久ダイキウながくこ

抱住他怎的」(『西遊記』七七) ●走風 Ⅱ「又没外人走風」(『紅七七』) ●にんそうする Ⅱ人相する。(遊里にて) 相手(多くは客)の様子から懷具合をはかつて、応対を調節して変えること。「引ケ四ツを下て聞の八人ン想され」(『万』宝曆九(一七五九) 札三) ●冷咲 Ⅱ「冷笑ニガワ」(『藁』) ●不妨 Ⅱ「不妨的」(『南』) ●だいない Ⅱ大事ないの略。「冷食でも。焼食でも。少々にほひのする。食でも。だひなひく。くるしくなひと」(天明二(一七八二)刊『夜話莊治』三) ●無奈 Ⅱ「無奈無家無業」(『紅』六八) ●しやうことがない Ⅱ為う事がない。仕方がない。身上もつぶさず金銀をつかい。人もうれしがり。敵役のいふ事なれども。是でやぼならしやう事がない」(安永九(一七八〇)刊『客者評判記』) ●気苦人 Ⅱ「気苦赤面ス」(『藁』) ●しやくる Ⅱそそのかすこと。また扇動して怒らせること。「おとみはよ町を立出しがらいぎがつれのしやくりしを女心にまこと、心へ」(安永六(一七七七)刊『妓者呼子鳥』五) ●決不肯 Ⅱ「不肯不肯ウケアヌ」(『南』) ●宛転 Ⅱ「宛転イロくサイカ」(『藁』) ●不喜飲 Ⅱ「衆人背地裡都不喜飲」(『金』六五) ●不好説 Ⅱ「不好説イハレヌ」(『南』) ●こしをし Ⅱ腰押。後押しをすること。またその人。「或は女郎盗人の腰おしするやうなる魔術を行ふ」(当世花街談義) 四) ●狼狽 Ⅱ「俗ニ所謂アトニモサキニモユカヌト云コトデウロタヘナンギスルコト」(『俗語訳義』) ●可憐 Ⅱ「可憐イト」(『藁』) ●思想 Ⅱ「思想オモフ」(『唐』) ●圈套 Ⅱ「圈套ナリ」(『藁』) ●支吾 Ⅱ「支吾イヒヌケ」(『藁』) ●ちよくら Ⅱ口から出まかせを

言うこと。おべんちやらを言うこと。またその人。「ちよくら弁口にてあやなす人ヲ云」(『辰巳之園』) ●約定 Ⅱ「約定ソケ」(『唐』) ●爽約 Ⅱ「爽約ガラフ」(『唐』) ●寧可 Ⅱ「寧可カツ」(『藁』) ●へんがへる Ⅱ変替える。「へんがへ」の動詞化。変更する、取り消すの意。「ようも。何くをやくそくして。へんがへせうとはにくし」(宝曆七(一七五七)以降刊カ『陽台三略』) ●関礙 Ⅱ「恐怕令尊大人也有些関礙」(『紅』一〇二) ●挿口 Ⅱ「王婆便挿口道」(『金』三) ●送人情 Ⅱ「人情ケケノコト」(『藁』) ●はなくすり Ⅱ鼻薬。用件を實現してもらうために渡す少々の金品。「約束し医術にハ無キ鼻薬リ」(『万』宝曆九(一七五九) 仁) ●推不知 Ⅱ「推不知道リラスル」(『唐』) ●欠情 Ⅱ「多多欠情」(『唐』) ●分手 Ⅱ「分手」(『編』) ●冷語 Ⅱ「冷語ワラ」(『藁』) ●煙火使者 Ⅱ「煙火使者 傾城星」(『テモヒツル神』) (『解』) ●かよふかみ Ⅱ通ふ神。遊女が手紙の封じ目に書く語。「高かこなた衆も拙者ともも。日本て生れて。神の御末に相違は御座らぬ。さるに因て。文にも通ふ神と書ではなるか」(安永八刊『廓中美人集』) ●信宿 Ⅱ「信宿漁人還泛泛」(杜甫「秋興八首」) ●居つゞけ Ⅱ居続け。遊女屋に連泊すること。「内から金引ツくりし出しゐつ、けをうつてゐるをいんきよ番頭どもが相だんで茶屋と女郎へたのんで一まづかへるやうにしてもらふといふやうな事とみゆ」(『蕩子筌枉解』) ●寛稚 Ⅱ「寛稚 ヒロイボ、」(『解』)

〔類聚〕前集四三「在艱戲擲」●はごをせおふ〓揆を背負う。揆はトリモチで鳥を取る罫。はがとも。転じて借金。意。「吉原のはご」をバ背負ハぬ五十から」〔誹風柳多留〕八二・三九

《翻刻》

扱これからちと酒にいたしまししよう

〇杜康すなはち酒を造りし人の名也 竹葉酒をつくる時酒のうちへ竹葉をい
洛陽梨花の時をもつて酒を 出門倒 透瓶香みな酒の 般若湯にやとうといふは
かますすなはち酒の名とす 濁醪い酒也 村醪地酒 醇醪よい酒 魯
んにやこには智恵と訓ず氣逆水をな 濁醪い酒也 村醪地酒 醇醪よい酒 魯
ぜはんにやと申ごととごさるか 濁醪い酒也 村醪地酒 醇醪よい酒 魯
酒き酒 蘭陵 新豊 田なといふかごとし 麴生 道術を行ふ大勢よりいふ人
し所へ見しらぬ人きたれり名をきくせいといふせつほうき劍をぬいてこれをきとたちまち極
かなれり人々此酒をのみてきくせい味が味わすべからずといふこれによつて酒をきくせいと云
か醸手つく 海量とはそこぬけ上戸也法華經普門品に九年以上宿酒皆無量と御さ 痛
飲大酒の 潦倒ほうだら 倒載 山簡といふ生酔しる 解醒 酣暢
とはほぎく 如泥 泥が故事 老酒 古酒 新釀 新酒 (廿二ウ) 流翠さへつお
とあふ也 飛觴 同 鸚鵡 玉罌 金屈卮 盃也 荷葉杯 此は蓮のまんなかを針にてつき蓋
す時はくきを四五 蕉葉飲 葉にかざるけだしにしへ蕉葉盃有 椰瓢 やしのさ 醉
分きりてさす也 金樽 青樽 清樽 酒家 酒棧 酒壚 旗
如泥かづき 亭屋也 酒旗酒はた也酒

《語釈》

●杜康〓古代中国で初めて酒を造った人とされる。転じて酒。「杜康善造酒以酉日死故酉日不飲酒会客」〔類聚〕続集一三「酉日不飲」

●竹葉〓酒の異称。「楚人汲漢水釀酒古宜城」略 唯餘竹葉麴留此千古情」〔類聚〕続集一三「竹葉酒」 ●出門倒〓透瓶香〓「我這酒叫做透瓶香又喚作出門倒」〔水滸伝〕第二二回 ●般若湯〓「むせうに末世の坊主困ひ者をするのやれ盤若湯を呑むの」(安永九刊

「大通俗一騎夜行」 ●濁醪〓「濁醪」(編) ●醇醪〓「初似飲醇醪」(白居易「負冬日」) ●魯酒〓「魯酒不可醉」(李白「沙丘城下寄杜甫」)

●蘭陵〓新豊〓「蘭陵美酒鬱金香」(李白「客中行」)「新豊酒 色清冷於鸚鵡 盃之中」(和漢朗詠集)「酒」元禄一六刊本) 李白

「沙丘城下寄杜甫」) ●麴生〓葉法喜〓「葉法善居真觀嘗有朝士詣之解帶淹留滿座思酒忽有一美措傲睨直入稱麴秀才年二十余」略) 一座

驚懼遽視乃一瓶釀醞咸笑飲之其味甚佳曰麴生風味不可忘也」〔類聚〕

続集一三「麴生風味」) ●海量〓「海量」(南) ●痛飲〓

「痛飲」(無理酒) (唐音和解) ●潦倒〓「潦倒たる人をあはれみ。人の恩をんをわすれず」(寛文一六六一) 初年刊「浮世物語」

三の二) ●ほうだら〓酔っ払いの意。「ほうで帰る歳暮の千鳥足」

〔誹風柳多留〕八五・二八) ●倒載〓山簡は西晋の刺史。異称は三公、山翁。李白の「秋穂歌」にも「醉上山公馬」と詠まれ、「山簡

倒載」の故事となる。 ●生酔〓なまゑひ。酔っ払いの意。「生酔ハ

おとかすやうなおくびをし」(誹風柳多留) 初・二九) ●解醒〓「猶

解醒当以酒也」(後漢書) 第五鍾離宋寒列伝) ●酣暢〓「人生飄忽

百年内 且須酣暢万古情」(答王十二寒夜独酌有懷) 李白) ●ほぎ

く〓陽気に酔いが回るさま。ほきはきとも。「勅使までほぎく

とする孝の道(『誹風柳多留』二六・一) ●如泥(以下「贈内」(李白)による。「三百六十日 日日醉如泥 雖為李白婦 何異太常妻」周沢は漢代の学者。後に太常(宗廟の祭祀を司る官吏)。物忌みをしてない一年の内の一日だけは泥酔していたとされる。 ●老酒(『老酒』三年酒) ●さいつおさへつ(『南』) ●さいつおさへつ(『南』) 盃を相手に差したり、もらったりして。「さいつおさへつくみあかしよるひるとなきはんえいは」(安永二・三(一七七三・七四) 刊カ『きつねのも』) ●飛觴(『文選』云飛觴、白蓋酒器也) ●類聚(続集一三「擘白」) ●鸚鵡(『鸚鵡盃』(『類聚』続集一三「酒器」詩句) ●玉罍(『玉罍屢擘傾金罍』(韓愈「憶昨行和張十一」) ●金屈卮(『勸君金屈卮』(于武陵「勸酒」) ※井伏鱒二の「サヨナラダケガ人生ダ」の訳で知られる詩の冒頭。 ●荷葉杯(『李宗閔暑月臨池以荷為盃』(『類聚』続集一三「荷盃」) ●蕉葉飲(『東坡云吾兄子明飲酒三蕉葉吾少時望見酒盞而醉今亦能三蕉葉矣』(『類聚』続集一三「蕉葉盃」) ●椰瓢(『土坑上却有兩個椰瓢取一個下來傾那甕酒來吃了』(『水滸伝』九) ●べくさかづき(可杯。飲み干すまで置けないように、下面が尖っていたり指で塞ぎながら飲むよう底に穴があいている盃。 ●金樽(『金樽清酒斗十千』(李白「行路難三首」) ●青樽(『別有青樽墨水春』(『南畝集』七「立春伊予德見過共酌墨水春」) ●清樽(『江水東流去、清樽日復斜』(杜甫「陪王侍御宴通泉東山野亭」) ●酒旗(『紅板江橋青酒旗』(白居易「楊柳枝」))

《翻刻》

扱また食物をちと申ましよう(二十三才)

○上饌 珍饌(めし)也 白粲(しらげ)たる米 脱粟(だつぞく)二番つきを 粗飯(そはん)めしつき 卓子(たくし)ほく 卓袱(たくふ) 野芹(やせふ)やさい 菜羹(さいこう)精進物の也 蓴羹(しんこう)ぬなはの 玉尺(ぎよく)うまほく 鈿(あか) 錘(つち)かつほ 枯魚(かぎょ)ひもの 馬面魚(ばめんぎょ)かつ 松魚(しょうぎょ)同 鉛刀(えんとう)魚(ぎょ)同 比目(ひひら)め 棘(えき) 鬣魚(げつぎょ)たい 章魚(しやうぎょ)たこ 海參(かいじん)なまこ 石決明(せきけつめい)あはび 華臍魚(けわせいぎょ)あんこう 海 鱈(たう)くじら 泥鱈(ぬいりやう)どじやう 西施舌(せいしご)みるくい 鱈(たう)残魚(ざんぎょ)(二十三才) 河豚(かどん) 賽河豚(さいかどん)ふぐもどき 水梭花(すいさくわ)僧(そう)にて魚(ぎょ)のことをいふたこ 膏粱(こうりやう) 滋味(じみ) うまの 別(わか)つ溜(しじやう) 瀝(れき) 瀝(れき)と瀝(れき)とは川(かわ)の名(な)也(なり)易(えき)牙(が)といふ人(ひと)あはばいしやにて此(こ)川(かわ) 海霜(かいそう) 霜(しも)も 竹胎(ちくたい)たけのこ 角黍(かくしよ)さま 広耳(ひろみみ) 仙餌(せんじ)まんぢう 豆乳(とうりゅう)ひものゆへひつくりかへてとうにう 西施乳(せいしにゅう) 馬乳(ばにゅう)いづれも葡萄(ぶどう)のこと也(なり)西施(せいし)のち、といふてござらう 洞庭(とうてい)柑橘(かんきつ) 香実(かうじつ)かや 胡桃(ことう)くるみ 栗(り)ち、かそんぜぬが馬(うま)の 玉実(たまじつ)なし 雪華(せつくわ)むめ 楊果(やうくわ)はやまも、 水团(すいだん)雪(ゆき)なし くり 仙卿(せんけい)も、 玉実(たまじつ)なし 雪華(せつくわ)むめ 楊果(やうくわ)はやまも、 水团(すいだん)雪(ゆき)なし 水晶(すいしやう) すいくは 甜瓜(かんま)はまははうり 胡瓜(こくわ)はさきうり 越瓜(えつか)はしろふり 茄子(かき) なすび 番南瓜(ばんなんか) かほ 甘藷(かんじよ)さつま 胡蘿蔔(こらふ)にんじん 蘿蔔(らふ)だいこん 雪花菜(せつふんさい)おかべのから也(なり)ねだちや 甘藷(かんじよ)も 胡蘿蔔(こらふ)にんじん 蘿蔔(らふ)だいこん 雪花菜(せつふんさい)おかべのから也(なり)ねだをつきました名(な)ほじあつてす 陽羨(やうぜん)茶(ちや) 佳名(かめい)同 香名(かうめい)同 こぶる風雅(ふうが)なものでござる

《語釈》

●白粲(しらげ) 秋菰(あきぐも)成(なり)黒米(くろまい)精鑿(せいさく)儲(たくわ)白粲(しらげ)精鑿(せいさく)出(で)左伝(さでん)菜食(さいじき)不鑿(ふさく)儲(たくわ)謂(い)治米(ちまい)使(し)白也(なり) ●類聚(るいじゆ) 後集(ごじゆ)二二「白粲(しらげ)」 ●脱粟(だつぞく) 玄米(げんまい)の意(い)。「脱粟(だつぞく)ハ纒(むす)脱粟(だつぞく)而已(のみ)不(ふ)精鑿(せいさく)也(なり)」(『蒙求(もうきう)和歌(わが)』一〇 国会(こくわい)本(ほん)) ●卓子(たくし) 中国風(ちゆうごくふう)の四脚(しよく)の食卓(じきたく)。「卓子(たくし)ツクエ〇シツホク」(『南(なん)』) ●ぬなは ぬなわ。蓴羹(しんこう)の古名(こな)。

● 枯魚ヒモノ 〓 「枯魚」(『編』) ● 松魚カツヲ 〓 「松魚」(『編』) ● 鉛刀魚シロ 〓 「鉛刀一割鉛刀魚」(『南畝集』一九「四月十二日、初めて葛子魚を喫ふ」)

● 比目ヒメ 〓 「ヒラメ 比目魚」(『編』) ● 棘鬣魚トウゴ 〓 「鯛 棘鬣」(『図会』)

● 海參カイサン 〓 とらご 海鼠 海參「(『図会』) とらごはナマコの異称。とらごとも。」 ● 石決明シヨクメイ 〓 「鮫 石決明」(『図会』) ● 華臍魚カワハシ 〓 「あんこう 華臍魚」(『図会』) ● 海鱒ウミマス 〓 「鯨 海鱒」(『図会』) ● 西施舌セシゲ 〓 「西施舌」(『編』) ● ミル貝ミルガイ (ミルクイガイ) の意。 ● 鱈殘魚タラシ 〓 「しろいを 鱈殘魚」(『図会』) ● ふぐもどきフグモドキ 〓 代用魚をフグのように調理して食べるもの。「河豚なき時は外の魚をふぐもどきと名付て喰ふ事歎かはしき事なり」(宝曆一三(一七六三) 刊『根南志具佐』二)

● 水梭花スイサカ 〓 「僧謂酒為般若湯謂魚為水梭花雞為鑽籬菜」(『東坡志林』二 釈道) ● 易牙イダ 〓 春秋時代、齊の桓公の寵臣・料理人。「孔子曰淄澠之合易牙嘗而知之」(『列子』説符) ● 角黍カクシ 〓 「角黍」(『編』)

● かやカヤ 〓 榧の実。 ● 胡桃ワクルミ 〓 「胡桃」(『南』) ● 栗子クリ 〓 「栗子」(『南』) ● 楊果ヤウクワ 〓 〓 雪なしユキナシ 〓 〓 ● 甜瓜マクハウ 〓 「甜瓜」(『編』) ● 越瓜セロウリ 〓 「越瓜」(『編』) ● 茄子キヤツウナスビ 〓 「茄子」(『南』) ● 番南瓜カボチヤ 〓 「番南瓜」(『編』) ● 甘藷カンショ 〓 「南」では「甘藷」サトウキビ ● 胡蘿蔔カボチャ 〓 「胡蘿蔔」ニンジン (『南』) ● 蘿蔔カブ 〓 「白蘿蔔」ダイコン (『南』) ● 雪花菜ツバキ 〓 「雪花菜」トウフ (『南』) ● 陽羨ヤウセン 〓 「天子須嘗陽羨茶」(盧仝「走筆謝孟諫議寄新茶」)

以下続く。